

日本近代デザイン史*

日野 永一**

1. はじめに
2. 日本の近代デザイン運動史について
3. 「もの」のデザイン史
4. 終わりに

1. はじめに

デザインの歴史といえは、今まではせいぜい美術史の片隅に申しわけ程度に述べられているだけで、一般にはあまり関心を持たれることも少なかった。しかも日本の近代デザインが欧米の強い影響のもとに出発したこともあって、日本のそれはデザイン史の中でも解明が遅れている部分でもある。

その理由の第一に上げられるのは研究者が少ないことである。本格的な研究が始められてからまだ10年程しか経ていない新しい分野であることが大きな原因であろう。また絶対数の不足に加えて、研究者のほとんどが一方でデザインの実務関係の研究・指導を本務とし、その合間を縫っての研究という実情もある。しかし最近若いデザイン関係者の中にも関心を寄せるものが増え、数年前からデザイン関係の学会にデザイン史の部会が設けられるなどの動きもあり、ようやく研究活動の活発な動きが期待できる状況となってきた。

第二はその対象分野の範囲が非常に広いことから生じる問題である。日常生活に用いる道具のデザインにしても、木工・染織・陶磁・金属等々様々な技術によって作られ、しかも例えば木材が建築にも家具・什器にも食器も用いられているように、人間生活の衣食住のあらゆる面と関係を持つ。またそれらの製作技術に用いられる道具類も研究の対象となろう。更に生活の道具といっても、過去の工芸史が対象としてきた主として上層階級が用いてきた道具の他に、

* 1986年2月20受理

** 兵庫教育大学学校教育学部

民俗学が対象とする民具もある。工芸史や民俗学は独自の分野を確立しているが、デザイン史という立場では各自が興味ある対象にばらばらに取り組んでいる現状で、全体としての密度を高めるにはまだ至っていない。

ただこうした「もの」の歴史ばかりでなく、デザイン独自の研究対象としてデザインの推進に先駆的な役割を果たした「人」の動きがある。従来デザイン史という場合にはこうした人の動き、つまりデザイン運動史を指すことが多かった。デザイン史とはデザイン運動史なのか、物のデザインの歴史なのかとは良く議論される場所である。こうした意味では現在まではどちらかといえば「人」の歴史が中心であったと言える。これは建築などと異なり、消耗品として使い捨てられてきた日常生活の道具が現在ではその収集も困難で、文献中心の人の動きの調査の方が容易であったからとも思われる。しかし後述のような「もの」についての興味ある研究成果も次第に増えてくるものと思われ、各分野の技術史との関係を一層深めた研究も多くなると考えられる。

第三はこうした対象を研究する上でのデザイン史としての観点、つまりその方法論が明確に確立していないことが上げられよう。これはなぜデザイン史が美術史ではなく産業技術史とも関係を持つようとしているのかという問いに答えることにもなるわけだが、従来の美術史が様式史中心に展開されてきたのに対し、様式だけではデザインの意味が解明されない、製作技術や生活あるいは文化との密接な関係を考察しなければならないという問題意識を研究者の多くが持っているからであろう。しかし実際問題となるとデザインの中にどの程度まで技術の問題を取り入れて考察すべきか、その判断に迷うことが多い。特にデザインの占めるウエイトの高い工芸品の分野においては一層困難である。生活史・文化史との関係に於ても同様である。これはデザインという技術が、物を実際に作るハードの技術ではなく、設計行為などと同様にソフトの技術であるその性格に多く起因しているのかも知れない。

しかしこれも研究の歴史がまだ浅いからであって、第二の理由のところでも述べたような、「もの」についての優れた研究の蓄積が重ねられることによって固まってくるものと思われる。

こうした理由でまだ研究成果も充分ではなく、その刊行物も少ない現状から、本来ならばもっと研究成果が蓄積されてからこうした研究展望を行なうべきであって、時期尚早の感があるわけだが、それでは十年あるいは数十年を待たねばならないことにもなるので、残念ながら本稿は研究成果の展望ではなく、研究の方向についての展望と、それらについての資料の紹介を行なうということでお許しを願うほかない。ただ研究者によっては、それぞれの研究分野との関連事項を調べたいという場合もあるかと思うので、出来るだけ多くの資料を紹介することにしたい。

2. 日本の近代デザイン運動史について

(1) デザイン運動の全体的展望

まず近代のデザインの流れ、デザイン界の動向について述べねばならないが、上述のように研究の歴史が浅い事から見るべき成果は少ない。ただその間にあって関係者の覚書だけでも残しておかねばという意識から、その記録が幾つかまとめられている。

「デザインの歴史のための第一の手がかりとして」関係者55人の証言を集めたものが『日本デザイン小史』(同編集同人編, 1970年, ダヴィッド社)。勿論この種の書では歴史を大きくさかのぼることは出来ず、大正後期から昭和20年までに焦点を当てているが、編者は「科学的基礎による機能主義を旗印として芸術と技術の問題を追求し、新しい途を開拓した」近代デザイン運動の思潮の下で、「美術を大衆へ、美術を生活へ」の反アカデミズムのスローガンが現在あるべき姿を作りだしてきたとしている。ただこの書に収録された人々は商業美術関係者が大部分を占め、他の分野に触れることは少ない。これに対し雑誌の連載ではあるが、出原栄一編「日本の近代デザイン運動史」(『デザイン』1962年1~12月)は、やはり57人の覚書を集めながらも、産業工芸と呼ばれた分野が中心となっている。ここでも編者は大正末から昭和初期の様々な活動について触れ、それらの運動が目的や主義は違っても「そのいずれもが従来の伝統的美術工芸に対する反発という形で現れてきた点では奇妙に軌を一に」するとし、それは伝統的・形式的・静観的・高踏的な19世紀芸術に対し「時代感覚に即し、実生活に即し、素材に即し、近代経済社会に即そうとする20世紀造形思想の発現」であるとする。しかしそうした思想も、当時の「産業革命の進行がまだ基幹産業に限られて、日用器具雑貨など末端の産業にまで十分浸透していなかった時期に生じた」ところに日本の特殊性があり、今日見るようなインダストリアル・デザインにまでの発展をなしえなかったと考察を加えている。

上記2編の書が現存の人々の証言から成り立っているため、その時期が大正以降に限られているが、明治期の動向を伝えたものに拙稿「日本のデザイン100年」(『インダストリアル・デザイン』No. 91~96, 1978年, 日本インダストリアル・デザイナー協会)がある。1873年のウィーン博から明治末までの状況を述べたものだが、ここではその期の特色を、専門教育機関の卒業生の大半が技術官吏や教員となっている例を上げ、官主導型として進められたが民間のデザイン向上には結果的に結びつかず、次の時代の種を蒔くにすぎなかったとしている。

直接デザイン史を扱ったものではないが、浦崎永錫の『日本近代美術発達史一明治編』(1974年, 東京美術)は、工芸界の動向について貴重な資料を多く載せているので便利。工芸関係では上野直昭編『明治文化史8一美術編』(1956年, 洋々社, 原書房より復刻あり)や中川千咲編『明治の工芸(日本の美術41)』(1969年, 至文堂), 鈴木健二編『原色現代日本の美術14一工芸』(1980年, 小学館)が、博覧会や産業的な側面にも触れ参考となる。これらの本は図版も多く、視覚的な理解をも助ける。

宣伝・広告美術関係では、東京アートディレクタークラブ編の『日本の広告美術1—ポスター』『同2—新聞広告』『同3—パッケージ』（1967年、美術出版社）があり、明治以降の作品の図版中心の本であるが、デザインの他、広告界・印刷技術の動向をも載せている。収録された作品に懐かしさを感じる人もあろう。インテリアデザインについては泉修二・中村圭介「日本の室内デザイン史」（日本インテリアデザイナー協会編『日本のインテリア』1970年、鹿島出版会）に詳しい。鍵和田務也の『デザイン史』（1984年、実教出版）は筆者も関係しているが、本来高等学校デザイン科の教科書として書かれたもので、東西の原始から現代までを対象とし、近世以前は物の歴史とし工芸史的内容を持っている。デザイン史としての観点がまだ確立していない現在であるため、時代を広げての見方はむしろ将来への意味を持つものと言えよう。近代以降のデザイン史については要領よく概括されているので大まかな流れを知るには良い。

変わった観点から述べたものに拙稿「デザイン用語の変遷」（『デザイン学研究』45号、1984年、日本デザイン学会）がある。デザインの訳語としての図按が古いイメージを嫌われて、本来アイデアの意である意匠に取って変わられ、戦後片仮名のデザインが用いられるまでの経過が描かれている。

（2）政府のデザイン政策を巡って

政府のデザインに関する諸政策は、明治以降常に輸出振興を軸として展開されてきた。明治期の工芸品の意匠改良、昭和初期の雑貨を中心としたデザイン問題、そして戦後も海外でのデザイン盗用問題から端を発したデザイン行政と。欧米と比較して工業化へのスタートが遅れた日本にとっては、手工芸品や手工業を中心とした雑貨産業の輸出振興は大きな課題でもあった。戦後の高度発展期を経て輸出超過が大きく騒がれている現在でも、通産省内のデザイン担当部署がまだ貿易局に置かれていることもそれらを象徴しているのかも知れない。一方で円高に悩む中小企業を抱え、そこではデザイン開発の必要性が叫ばれていることを考えると、明治からの課題はまだ完全に解決されていないような気もする。そうした意味からも、デザインについての政策を振り返ってみる必要があるだろう。

日本の産業振興にデザインが必要であるとの認識が生じたのは、明治6年のウィーン万国博を機としてである。特にお雇い外国人ワグネルによる帰国後の「東京博物館建設報告書—芸術の部」にその重要性和推進のための具体的提案がされている。その後の彼の講演にも、度々その主張が見られる。こうしたワグネルの論は植田豊橘編『ワグネル伝』（1925年、博覧会出版協会）、梅田音五郎編『ワグネル先生追懐集』（1938年、故ワグネル博士記念会）、土屋喬雄編『G・ワグネル維新産業建設論策集成』（1976年復刻、原書房）の3冊に収録されている。なお、その伝記は上記の書の他、塩田力蔵『陶磁工芸の研究』（1927年、アルス）には個人的側面も記されていて興味深い。

ウィーン万国博での伝習生のうち、金沢・高岡・高松の各地に工芸学校を設立して教育に大

きな足跡を残した納富介次郎については、井手誠二郎編『産業工芸の先覚納富介次郎略伝』（1976年、西日本新聞社）があるが、やはり工芸振興にも功あった平山成信・塩田真の兄弟で、ウィーンで5年間のデザイン留学生生活を送り、帰国後農商務省や特許局でデザインに関する業務に従事した平山英三についての研究は、緒方康二の論文「明治とデザイン——平山英三をめぐる」（1982年、『デザイン理論』21号、意匠学会）がある程度で、一般には忘れられた存在となっている。

なお同じウィーン博の伝習生で、地図や銅版画を学び、帰国後地図の製版に携わった岩橋教章の記録として『正智遺稿』（1911年）が子息の手で刊行されている。

工芸品の輸出振興は、明治初期には国策の一つであったことから、海外の万国博覧会、国内の勸業博覧会・共進会においてもデザインの問題が重視された筈だが、まだこの面でのまとまった研究はほとんど見ない。博覧会全般については、吉田光邦『万国博覧会——技術文明史的に』（1970年、日本放送出版協会）があり、デザインの持つ意味をも明解に分析している。万博に関連した事項では、ウィーン博を機に設立された起立工商会社については、香取秀真「西尾卓郎翁の談話」（『金工史談—統編』、1976年復刻、国書刊行会）が詳しく、内情なども示されていて興味深い。またこの会社から独立し、パリで美術商として活躍した林忠正については定塚武敏『海を渡る浮世絵——林忠正の生涯』（1981年、美術公論社）があり、東西文化の交流と言う点でも楽しく読めよう。また、博覧会が単なる物によるコミュニケーションの場に留まらず人の考え方にまで影響を与えた例として、内外の博覧会を通して美術や美術工芸の概念がどう形成されたかを論じたものに拙稿「万国博覧会と日本の『美術工芸』」（吉田光邦編『万国博覧会の研究』、1986年、思文閣出版）がある。

勸業の一環としてのデザイン政策については、明治9年内務省に設置された製品画図掛が大蔵省・農商務省と機構改革に伴い転々とし18年に廃止されるが、その後農商務省を中心として展開され、また21年には意匠条例も発布される。その農商務省の施策には海外実業練習生度や商品陳列館の設置、商品改良会の開催などがあるが、まだその全貌は明らかにされていない。『商工彙報』『商品陳列館報告』『海外実業練習生報告』等の資料の分析が必要であろう。

ただ大正に入ると商品のデザイン改良を主目的とした「農商務省図案及応用作品展（通称農展）」が開催され、毎年の入選作品の図録が刊行されている。当時の工芸品の流行を知る資料ともなる。

昭和に入ると、商工省の工芸指導所が仙台に設置される。現在は筑波の製品科学研究所となっているが、この歴史は『産業工芸試験所30年史』『製品科学研究所50年史』の内部刊行物にまとめられている。初代所長の国井喜太郎は、納富介次郎の影響を受けてこの道に入った人だが、その業績は『デザインの先覚者国井喜太郎』（1969年、国井喜太郎先生顕彰会）に詳しい。この本には豊口克平・剣持勇・勝見勝ら元所員の座談会が収録されているが、「工業品の美化・工芸品の工業化」という当時としては新しい方針を示しながらも、産業との結び付きにおいて

大きな成果を上げえなかった限界を指摘している。

昭和8年来日したドイツの建築家ブルーノ・タウトも、一時この工芸指導所に関係し、「仙台国立工芸指導所に対する提案」のなかで日本的な材料と技術から生じる「質」による近代的製作、いわゆる近代デザインの方向を示唆している。タウトには『タウトの日記』（1975年、岩波書店）、『日本美の再発見』（1939年、岩波書店）等の著作も多く、日本人にとっても親しい存在である。一昨年開催された「建築家ブルーノ・タウトのすべて」と題する展覧会が、写真を中心とした非常に地味な会でありながら、予想外の人を集めたことも人気の強さを伺わせる。なお同展覧会の図録（1984年、武蔵野美術大学）は、主要作品や文献目録が収録されて便利。

戦前の輸出品高級化を意図した商工行政の一環として、海外デザイナーの指導・助言を仰ぐ制度が取られ、昭和15年にはフランスの建築家コルビジエの門弟シャルロット・ペリアンが来日した。1年間の指導の成果は『選択・伝統・創造』（1941年、小山書店）に示されている。

輸出振興のため商工省貿易局は工芸家・デザイナーに委嘱して海外のデザイン動向の調査も行なっている。山崎覚太郎の『海外工芸の新傾向』（1937年）、宮下孝雄『時局下の世界工芸』（1940年）、水町和郎『南北亜米利加の工芸概観』（1941年）などの報告書が日本輸出工芸联合会から刊行されている。

戦争体制下ではデザインなど贅沢なものを見なされ、多くは代用品研究に従事した。また公定価格制度や奢侈製品の製造販売の制限が行なわれたが、芸術家や全国各地の伝統的な工芸技術保持者については、その技術保存を図るため例外的に材料の配給等の保護措置が取られた。このことは戦争による技術の断絶を最小限に防ぎ、戦後の無形文化財の保護にも通じる政策であったが、現在では忘れ去られた存在となっている。幸いにして当時その任に当たった西川友武の『美術及工芸技術の保存』（1966年、工芸学会）が残されているので、当時の経過を詳しく知ることが出来る。

戦後についてはさて置くとしても、地方の状況については触れておく必要がある。

中央の政策と同じように、当初は絵画や工芸の振興がそのままデザインの振興につながると認識されていたため、これらの展覧会の開催は各地で行なわれたが、その効果は疑問である。デザインの面から興味あるのは昭和初期の大阪である。大阪では府立商品陳列所内に、大正の初年から図案課が設置され業界の指導業務を行なっていた。大正末には府の指導もあって工芸協会が設置され、昭和7年には工業奨励館の中に工芸産業奨励部も置かれる。大阪の特色である雑貨産業のデザインと技術の振興が中心の業務であった。10年からは「大阪府産業工芸博覧会」を開催し、行政・民間を含めて最もデザインに対する高まりを見せた地であった。そのため京都との誘致運動にも勝って、工芸指導所の関西支所の開設をも見る。残念ながらこれらの動向の研究はまだ手つかずの状況で、当時の展覧会の報告書、『大阪府工芸協会雑誌』『大阪工芸情報』『産業工芸』などの雑誌を探るほかない。他の地域の状況もまだ未解明だが、静岡・神奈川・東京など輸出工芸品を抱えていた地域がデザインの指導にも熱心であった。

(3) 民間のデザイン動向

明治初期の欧風化の風潮の中で、日本の美術・工芸品の振興を願い、ウィーン博の関係者が集まり龍池会（後ち日本美術協会と改称）を結成するのが明治12年。パリで展覧会を開催したり、帝室技芸員制度の制定を図るなど明治の美術界の一方に君臨していた。よく国粹主義の旗手として岡倉天心やフェノロサの名が上げられるが、その糸口を開いたばかりでなく、社会に対して最も強い影響力を持っていたのはこの龍池会の方であった。この会の活動については『工藝叢談』『龍池会報告』『日本美術協会報告』などの記録が残されている。またこれらの雑誌には当時の指導者たちの評論なども載せられて参考となる。

東京では上からの啓蒙的な運動として展開されたのに対し、関西では職能の確立という実質的な動きが中心であった。明治20年頃には既に京都では友禅の、大阪でもモスリン友禅の図案を職業とする者があった。大阪のデザイン状況については大阪府立商品陳列所の『回顧30年』（1920年、同記念協賛会）中に「工藝図案」の項があり、染色図案・製版図案・広告等について述べられている。

京都はさすがに工芸の都、資料も多く残されている。染色のデザインについての状況は、村上文芽『近代友禅史』（1927年、芸艸堂）に詳しく、当時の技術や流行の変遷にまで触れている。また染織図案家の動向を記したものに織田萌編『染織図案変遷史』（1929年、毛斯綸協会）と、比沼悟『近代図案ものがたり』（1972年、京都書院）があるが、両書とも前記村上の著書からの引用が多く、また誤りも見られるので注意。美術・工芸界全般の動きは京都美術協会の刊行になる『京都美術雑誌』（1890～92年）、『京都美術協会雑誌』（1892～1905年）、『京都美術』（1905～1919年）の中から拾うほかない。ただ漆器関係には京都漆器工芸協同組合編『京漆器——近代の美と伝統』（1983年、光琳社出版）中に、拙稿「京漆器近代デザインの流れ」があり、同書には他に博覧会・共進会を通して京漆器を見た吉田光邦の「近代のなかの京漆器」や山内明の京漆器の技術、貫秀高の業界史に関する論文等が収録され、100年の推移を立体的に明らかにしている。なお貫秀高には一般の目には触れにくい「明治の伝統産業——そこに従事した人々」（1978～79年、『京都商工情報』No.109～112、京都市経済局）と題する大部の論文があり、京都産業界の当時の姿を詳細に描いてみせている。

近代の京都の工芸作品——特に陶磁器——についての本はあまりにも多いので、一般書であるが一冊だけ『京都の工芸』（吉田光邦・山内明・日野永一編、1984年、平凡社）を上げておこう。カラー図版が豊富なので、その意味でも楽しめよう。

明治も後期になると海外のデザイン動向が国内にも直接影響を与えるようになる。まず1900年パリ万博を機としてアール・ヌーボーが。これに対して当時の東京や京都の動向は、拙稿「アール・ヌーボーと日本の図案界」（科研報告書『アール・ヌーボーと日本』、1982年、国立国際美術館）に詳しい。またこの影響を受けた人々やその系譜、例えば夏目漱石一橋口五葉、黒田清輝一杉浦非水などについての評論に海野弘『日本のアール・ヌーボー』（1978年、青土社）が

ある。晩年を京都で送った浅井忠のデザインについては前記拙稿の他、芳賀徹『絵画の領分』（1984年、朝日新聞社）も触れている。その作品は黙語会編『黙語図案集』（1909年、芸艸堂）や『浅井忠展カタログ』（1981年、京都新聞社）に見ることができる。

大正以降、海外の新しい思潮も次々と紹介されるが、それを知るには当時の雑誌に掲載された紹介記事を一冊にまとめた『工芸美術を語る』（1930年、アトリエ社）が便利。大正末にはドイツ工作連盟の影響を受けて帝国工芸会が結成され雑誌『帝国工芸』も発刊された。パウハウスの影響については教育の項で述べよう。ウィリアム・モリスについては古くから本間久雄、加田哲二、北野大吉、河田嗣郎などの紹介があるが、戦前の日本への影響は、モリス100年記念協会の『モリス記念論集』（1934年、川瀬日進堂）中に展望されている。モリス自身についての著作や研究はここでは関係がないので除くとして、戦後の研究で日本への影響に触れたものとして、小野二郎『ウィリアム・モリス』（1973年、中央公論社）、山本正三『ウィリアム・モリスのこと』（1980年、相模書房）を上げておこう。前者は戦前の知識人に、後者は民芸運動に対しての影響に触れる。

こうしたデザインの動向を実際に体験した「自分史」としての記録も数は少ないが残されている。古いところでは木材工芸に関係した木檜怒一の『私の工芸生活抄誌』（1942年、遷暦祝賀実行会）がある。戦前から資生堂の宣伝デザイナーとして活躍してきた山名文夫の『体験のデザイン史』（1976年、ダヴィッド社）と、鐘紡のデザイナー上田健一の『糸へんデザイナーの歩み』（1981年、大阪都市協会）は、東京・大阪のそれぞれの背景を写し出している。他に堀内誠一『父の時代・私の時代』（1979年、日本エディタースクール）がある。

(4) デザイン教育について

日本の美術教育はデザイン教育の目的を持って開始された感が強い。明治9年開校の工部美術学校も洋風建築の室内装飾家の養成が主目的であった。その記録は旧工部大学校史料編纂会『旧工部大学校史料・同附録』（1931年、虎之門会、1978年青史社から復刻）があるが、美術学校については青木茂『フォントネージと工部美術学校（近代の美術46）』（1978年、至文堂）、近代美術館編『フォントネージ、ラグーザと明治前期の美術』（1977年、国立近代美術館）の方が詳しい。明治13年開設の京都府画学校については百年史編集委員会編『百年史——京都市立芸術大学』（1981年、同校発行）が、20年間開校の東京美術学校については磯崎康彦・吉田千鶴子『東京美術学校の歴史』（1977年、三晃書房）がある。「普通工業品に於ける図案者」の養成を目的とした東京工業学校（現東京工大）工業図案科の設置が30年、京都高等工芸学校の開校が35年、どちらも内部関係の資料しかない。

明治末に数冊の図案技法書が出版される。中でも小室信蔵の『一般図按法』（1909年、丸善）は後に図案技法の中心となる便化の技法を展開する。もっともこれは専門教育機関では受け入れられず、当初小・中学校の図画の授業に普及する。この小室信蔵については緒方康二「明治

とデザイン——小室信蔵」(1980年、『デザイン理論』19号, 意匠学会)がある。昭和初期バウハウスの教育方法の紹介の時も、やはり専門教育ではなく普通教育から普及した経過を持つ。川喜田煉七郎らの情熱によるものだが、その成果は武井勝雄との共著『構成教育大系』(1934年, 学校美術協会)等に見ることが出来る。しかしその普及過程についての研究はまだ公刊されていない。

普通教育中の図画・工作は当初技術教育的色彩を強く持っていたものであるが、現在の美術教育に至るまでの経過は山形寛『日本美術教育史』(1967年, 黎明書房)に詳しく、中村亨編『日本美術教育の変遷』(1979年, 日本文教出版)は教科書中心に述べられている。

(5) 産業工芸論について

最後に日本の工芸を産業として発展させるべきとした様々な論の展開を簡単に見よう。

日本の工芸が明治以来の殖産興業政策の延長上にある輸出産業としての工芸と、江戸時代の延長にある美術工芸の2つのラインがあることを明らかにしたものに吉田光邦の「現代工芸の感想」(『芸術の解析/吉田光邦評論集I』, 1982年, 思文閣出版)があるが、輸出工芸の分野では明治以降常にデザインの改良が大きな問題であった。古いところでは田口卯吉『日本の意匠及情交』(1887年, 経済雑誌社), ワグネル「工業の方針」(前掲『Gワグネル維新産業建設論策集成』に収録)などがあり、大正期では概説的な市川数造『美術工業論』(1914年, 隆文館), 企業家に影響を与えた安田禄造『本邦工芸の現在及将来』(1917年, 広文堂), 論理的完成度の高い権田保之助『美術工芸論』(1911年, 内田老鶴舗)が代表的存在。昭和に入ると例えば宮下孝雄『欧州文様美術』(1927年, 東邦社), 板垣鷹穂『機械と芸術との交流』(1929年, 岩波書店)等むしろ海外動向の紹介が多くなる。2, 3特色のあるものを上げると、『現代商業美術全集24—商業美術総論』(1930年, アルス)では浜田増治が純粋美術に対し商業美術は現代の大衆に語りかける新しい芸術だと論じ、長谷川七郎の『機械芸術』(1943年, アルス)は戦時下でありながらアメリカの工業デザインの紹介をしたものが見られる。

こうして論理的には先駆的な研究を見ながらも、実際のデザイン活動は、戦後のそれも30年ごろにアメリカの影響と消費関連産業の工業化によってようやく展開を見る。その担い手は戦前の産業工芸関係者が中心となるが、そこには工芸から工業への断絶的な飛躍があり、工芸の産業化は未解決のまま残された。一方に江戸時代からの延長の美術工芸を残し、片方でデザインの近代化の波に乗り遅れた伝統的工芸を持つ現代日本の状況については、新たな分析が必要であろう。

3. 「もの」のデザイン史

西欧のデザイン史の古典的な研究・例えば1936年初版の Pevsner “Pioneers of modern design”あたりでは、人の動きを中心としたいわゆるデザイン運動史というべき内容を持って

いたが、最近の研究、例えば今手元にある Heskett の “Industrial design” や Lucie-Smith の “A history of industrial design” では、「もの」を中心としたデザインの歴史が展開されている。このようにヨーロッパでも「人」のデザイン史から「もの」のデザイン史への移行には、年月の蓄積を必要としたようである。そうした意味では「もの」を中心とした本格的なデザインの歴史が書かれるには、まだ多くの蓄積を待たねばなるまい。しかし現在でも断片的にはあるが興味深い研究を見出す。ただそこで書かれた「もの」のデザインの歴史は、技術の歴史と明確に線が引きにくく、また近代以降を対象とするとしても、それ以前の伝統から切り離して考えることも困難である。それに様々な場で発表された研究すべてに目を通すことも実際上不可能である。そこで独断を持って幾つかの問題をランダムに取り上げ、そこでの研究に触れてみることにしたい。

(1) 文明開化期のデザイン

時代の変わり目には平穏な時には見られない現象が起き、新しい「もの」の発生も多くこの様な時期に見られるとし、萩出身の萩山平兵衛の「萩乃屋」の汽車土瓶、ランプ火舎(ほや)・ガラス食器・洋食器・ほうろろ鍋の国産化を論じたのが、後藤勇雄「文明開化期における日用雑器の発生と形成」(1976年、『デザイン理論』15号、意匠学会)。その発生・形成の過程には幾つかのタイプがあることを明らかにしている。その汽車土瓶は日本の生活風土から発生し、文明開化の副産物的なものであるとしているが、田村栄太郎『日本職人技術文化史一上・下』(1984年、雄山閣)に取り上げられている人力車などもその系譜に入るのかも知れない。輸出産業にまで発展し自動車の出現によって減った人力車だが、日本人の発想による「もの」の歴史は、日本人そのものを写した面白さがある。その自動車の、あまりにも日本的な自動車である霊柩車のデザインの発祥を解明した井上章一『霊柩車の誕生』(1984年、朝日新聞社)は、江戸時代の大名行列にまでさかのぼり、我々がふだん見過ごしている物にも重い意味があることを知らせてくれる。こうした「もの」を通して社会・文化を語る研究が増えることによって、デザイン史の幅と厚みを増すことが期待できよう。

生活に密着した台所やその道具の研究には柴久庵憲司とGK研究所の『台所道具の歴史』(1976年、柴田書店)、GK研究所と山口昌伴『図説台所道具の歴史』(1978年、柴田書店)がある。前者は原始からの歴史的考察、後者は火の具・水の具・加工の具等の分類の下に豊富な図版でその変遷を見せてくれる。その火の具でもあるガスに関しては、中村君郎・江面嗣人・山口昌伴の『ガス灯からオープンまで』(1983年、鹿島出版会)があり、ガス事業・住居の変遷とガス設備・ガス器具の変遷と3つの側面からアプローチする。この中で山口が述懐しているように、戦時中450万台も作られた陶製ガスコンロはどこへ消えてしまったのか。その姿を見ることも出来ない現在である。気が付いた時には姿を消している、そうした日常生活の道具で、今記録を残しておかねばならないものも多かるう。例えば『明治・大正くらしの物語一上・下』

(1978年, ベストセラーズ)にはガス・電気製品, プリキ玩具, 万年筆, 時計, 蓄音機等々安物の古道具屋の店頭よろしく様々なものが並べられているが, こうした回顧趣味や好事家の興味からでなく, 日用雑器であっても産業技術・生活の中での位置・デザインの変遷等立体的な究明が必要である。幸いにして, たとえば中野政樹編『灯火器』(日本の美術117号)のように美術史の立場からランプ, ガス灯にまで触れようとする試みも見られ, これからは多くの人の関心を引く分野ともなってくるのではあるまいか。

こうした「もの」の歴史については, 個々の書名を上げることは控えるが, 法政大学出版局から「ものと人間の文化史」と題する叢書が刊行され, 既に数十冊を数える。

(2) 木材・工芸・家具

明治期の木工産業の全貌は, 農商務省山林局編『木材の工芸的利用』(1912年, 大日本山林会, 1982年に林業科学技術振興所より復刻)により知ることが出来, 機械化の導入経過については宮原省久の労作『木材工業史話』(1950年, 材料新聞社)が, また最近の木材工芸の状況を知るには例えば柳・渋谷・内掘編『木竹工芸の事典』(1985年, 朝倉書店)などがある。木材工芸の主要な製品はやはり家具であり, 什器類では漆器類がデザインの対象として興味あるところであろう。

さてその家具のデザインであるが, 近代以降の変遷を概括するものに小泉和子「家具」(太田博太郎編『住宅近代史』, 1969年, 雄山閣)があり, 同書中の建築関係の論文と合わせて読むと生活の中での位置付けも理解できよう。同じく小泉和子の『和家具』(1977年, 小学館)は図版中心, 『箆管』(1982年, 法政大学出版局)は近代に入ってから各地で独自のデザインの発展を見せた箆管の研究。その他個別的研究では, 明治初年から洋式家具の産地として栄えた横浜を描いた弦田平八郎の「横浜家具」(神奈川県立近代美術館編『神奈川県美術風土記』, 1971年, 有隣堂)は, 洋家具の生産が和家具屋からの転向でなく馬具作りから椅子の革張りへ, 駕籠作りや宮彫師がその割物をという変動期の職業的变化の例をも示している。また宮内慤による「長櫃考」「続長櫃考」(1983年, 『デザイン学研究』40・41号, 日本デザイン学会)は, その復元まで試みた貴重なもの。

家具ではないが, 芳井敬郎「第5回内国勸業博のディスプレイ」(前掲『万国博覧会の研究』所収)は当時の博覧会の陳列や装飾に対する人々の動きを伝える。

(3) 海外への影響

デザインの一分野に文様の問題があるが, 多くは近代以前に主眼が置かれているので今回は触れないで置くが, 全く変わった観点から, 日本の工芸品のデザインが海外へ与えた影響について取り上げてみたい。一般に近代以降の日本の産業技術は海外の影響下に発展を見たこともあって, 海外からの影響には触れても, 日本からの影響が顧みられることは少ない。また影響

の受け手はその記憶を持っていても、与えた方はそれを意識していない例が多く、ここでは海外での研究情報が中心となる。それも現在は欧米との関係が主体となっているが、今後日本と開発途上国との関係も一つの研究課題となってこよう。

その欧米への影響は、浮世絵については多くの書で述べられているが、工芸品やそのデザインについて触れたものは意外に少ない。中では吉田光邦『両洋の眼——幕末明治の文化接触』（1978年、朝日新聞社）がオールコック、レイトン、オスボーンなど主として英国人の目に写った日本のデザインについて述べる。オールコックの『大君の都 上・中・下』（山口光朔訳、1962年、岩波書店）中にも彼の日本の工芸観が散見されるが、日本の美術や工芸についての著作は未翻訳。同じ日本の建築・美術・工芸についてのドレッサーの本も未紹介だったが、最近鈴木博之の「クリストファー・ドレッサーと日本」（前掲『万国博覧会の研究』所収）で触れられている。他にアドバーガム著・愛甲健児訳『リパティ―百貨店』（1978年、パルコ）、スペンサー著・愛甲健児訳『イーセティック・ムーブメント』（1978年、パルコ）も英国内の日本の影響について触れている。

フランスへのそれについてはアール・ヌーボーの推進者として知られるビングが1888～91年に刊行した雑誌『芸術の日本』の翻訳（1981年、美術公論社）が基本的文献となろう。初期の日本愛好者については、1878年に発表されたシェノーの論文「パリに於ける日本」の抄訳が資料として『浮世絵と印象派の画家たち展』カタログ（1979年、2001年日本委員会）に収められているし、大島清次『ジャポニスム』（1980年、美術公論社）には周辺の事情も記されている。

こうした海外へ流れた美術・工芸品の状況を知るには、瀬木慎一「日本美術流失史」（1977年、『別冊・太陽21 海外へ流失した秘宝』平凡社）が便利である。

4. 終わりに

以上、近代のデザインに関する人と物の歴史についての展望を行ってきたが、関係領域については述べきれなかった面も多い。また近代以前の物の歴史、つまり工芸の歴史の研究には今回触れることが出来なかった。いずれ機会を得て、まとめてみたいと思う。